「そして、続く」

ペンネーム　栗山文月

夫は大工だ。出会った頃は滋賀県の社寺建築専門の工務店に所属し、和歌山の新築のお寺（本堂とお寺さんが暮らす家・庫裏）を建てていた。その現場は着工から完成まで三年以上かかったそうで、夫はそのうち二年程携わり、お寺の近くの飯場で寝泊まりしていた。彼のスペースは、畳一畳ほどの布団を敷く場所と、その横に簡単な荷物を置くだけ。まさにタコ部屋のような場所で、二〇代から六〇代の職人が現場の状況に応じて入れ替わりながら生活していた。食事は朝はご飯と即席みそ汁、昼と夜は仕出し弁当。夜は大概の大工さんはお酒を飲む。プライベートなどなく、衣食住が管理された世界だったと聞く。平成の時代に、昭和の徒弟制度が残る職場。夫の同期は次々と去っていったそうだ。

休日は滋賀の自宅に戻ったり、当時付き合っていた彼女と会ったり、たまに一緒に作業している大工さんと近くの重要文化財の寺院を見に行っては「これは何時代に建立された」「シンプルなデザインだけど、手間がかかっている」「屋根の反りが美しい」と勉強していた。カンナやノミなどの手道具や丸鋸やインパクトなどの電気工具は自分持ちなので、高額にもかかわらず躊躇することなく購入していた。

「さすが、宮大工さんだな」。

だから、結婚した十数年前、夫の給料や待遇を知った時、その賃金の低さや休みの少なさ、労働時間の長さ、保障の薄さに衝撃を受けた。社会的には尊敬される仕事だと思っていたが、そうではなかったのか？この給料で家族を持ち、生活できるの？こんなんじゃあ、道具をバンバン買えなくなるよ…と、不安ばかり募っていたことを思い出す。

その後、北海道の工務店に数年お世話

ペンネーム　**栗山文月**さん

農家ではないけれど、農村地区に夫と息子２人、犬１匹とともに暮らす。

夫は大工。

600坪の畑は義父母が管理。ときどき、苗や野菜をご近所さんからおすそ分けいただく。

水路の掃除や集落の草刈りにも参加し、農村での暮らしを楽しむアラフォー母さん。

になったが、冬には仕事が薄くなるからと十一月末で雇用を切られ、春までは失業手当を受け取って欲しいと言われた。それはうちだけではなく、大工はみなそうなのだと夫に聞かされた。信じられなかった。

◆
◆
◆

私と結婚する前、夫は宮大工をしながら、貴重な週一回の休みに大工仲間と友人の店をリノベーションしたことがあると聞いた。大阪市内の小さな古着着物の店で、友人の要望を叶えるためにはどうしたらよいか…時には先輩大工を誘い、技術的な相談もしながらボランティアで作っていた。なぜ、お金ももらわずに手伝ったのかと聞くと、自分でアイディアを出し、どうしたらよくなるかを考えながら作ることが楽しかったそうだ。

また、夫は現場からよく木板をもらってきた。毎回、ヒノキやスギの木目の通った板など高価な部材をもらってくる。どうしたのかを聞くと、決まって「捨てるっていうから、もったいなくて」。

夫はその材料で、様々な種類のまな板を作ってくれた。そのうち、番線という、現場で木材をしばる金具を使って、まな板に持ち手を付け出した。まな板をぶら下げることができるナイスアイディア。両親や友人にプレゼントしているうちに「欲しい」という声が少しずつ出始めた。

そのうちに友人から「硯入れが欲しい」「メダル入れが欲しい」と相談を受けるようになった。「こんな木があるから、デザインはこうしてはどうか」など、相手とことん話し合い、オリジナル製品を作り上げていった。

仕事はいつも通り。体はきついはずなのに、そんなときの夫は生き生きしていた。

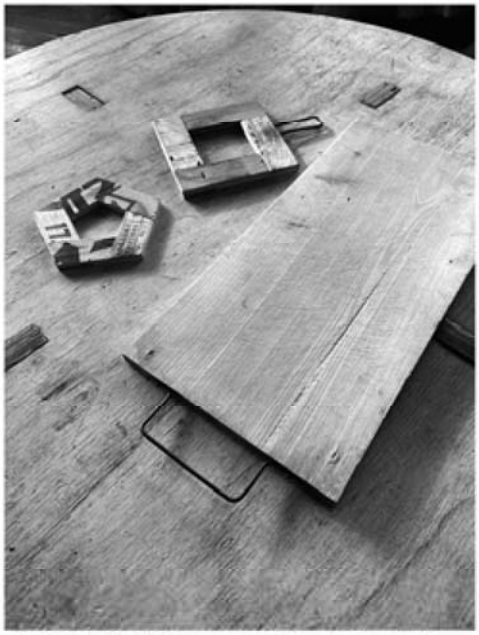
◆ ◆ ◆

夫が木箱と出会ったのは、今の家を直している頃だった。魚屋さんの脇に野積みにされていた木箱を見るたびに「かっこいいなぁ」「もらえないかな」と話していたと思ったら、ある日、一緒に取りに行こうと誘われた。私は全然乗り気じゃなかったけれど、一人じゃ大変だろうと仕方がなくついていった。

店の外に無造作に積まれていた木箱は、枯葉にうずもれかかっていた。箒でさっと払い、次々と軽トラの荷台に積んでいった。魚の匂いはほとんどしないけれど、今までもらってきた新築の端材もたくさんある中、夫がどうしてこの箱が欲しいのかは全く分からない。私には、もう役目を終え、朽ちていくだけの木箱にしか見えない。夫にそう伝えると「いや、木を使い切っていない。この箱はまだ使える」という。

軽トラに山積みにした木箱。夫は休みになると箱を分解して板にしては鍋敷きやカバン、椅子を、箱のまま組み合わせて子どもたちの二段ベッドや調味料棚を作っていった。そうしてできたものは、いつのまにか、私たち家族の暮らしにしぜんと参加していた。

そういえば、今の家をリノベーションしている最中も、壁に箱の板を貼り出し「一部、こんな風にしたいんだけれど、いいかな?」と聞いてきたことがあった。いくら何でも壁に貼ることないでしょ。それは嫌、と一蹴したこともあった。



まな板、鍋敷き、ちゃぶ台。どれも夫作。
毎日、家で使っています。

◆ ◆ ◆

私は決して、木箱でものづくりをしている夫を否定はしなかったが、積極的に応援していたわけでもなかった。一時、夫が学生時代の友人にアドバイスをもらおうとしていたことがあったのだが、「木箱で面白い製品を作り出すのは難しいかもしれない」という話をしていた時には、正直、私も同意見だった。

でも、夫はめげなかった。作りたいも

窓の下の壁に木箱が！途中で待ったをかけたので、ここだけ貼られています。

のが頭に浮かんだらまずは作ってみる、実際に使う、使い勝手が悪いものは修正する、を何度も繰り返していた。そして、最後はいつも決まって「カッコいいよね」。

そうこうしているうちに、仲間も製品も増えてきたので、シャケサミットと題して、木箱製品の披露と木箱製楽器でのライブを始めた。一回目は約五十名、二回目は約四十名の方々が参加してくれた。今まで夫が愛情をもって作り育ててきた製品たちが世の中に出て行った瞬間でもあった。あちこちから「これ、面白いね」「かわいいね」「楽器の音がキレイ」という声が聞こえてきた。

みんな、お世辞じゃないの？木箱製品って本当にかわいいの？面白い訳？その熱と雰囲気に腰が抜けそうになるほど、心底驚いた。

夫は、今まで自分が作った製品が認知されるようになって、制作意欲はさらに加速した。そして、いろんな人たちから声がかかり、展示会を開催するようになった。東京目黒区のギャラリー、台湾、札幌・旭川のデザイン事務所…毎回夫は全力でチャレンジしていた。

今年十二月には札幌市内の公共施設で展示会を開催、九日間の開催で約二、〇〇〇人の方が来場してくれた。マスコミ関係の友人たちも応援してくれた。

◆　◆　◆

イベントを開催するたびに私や息子たち、夫の両親と家族総出で手伝い、お金が足りなくなると家計費を持ち出した。だんだん規模が大きくなるにつれ、その負担は大きくなっていった。私は「お金を出して買ってもらえるような製品を作ることができるのか」「いつになったら黒字になるのか」と、何度も夫に詰め寄ったこともある。正直、今もなお、木箱のプロジェクトは黒字ではない。

それでも夫の、誰に何を言われても作ることを辞めず、家族を説得しながら、少しずつ売り上げを伸ばし、毎回やり方を見直しながら情熱的に取り組み続けていることは尊敬に値する素晴らしいこと

だと思う。

息子たちもそんな父親の姿を見て育ってきた。いつも身近に彼の作ったものがあり、イベントのたびに否応なしに手伝わせた。長男は今、家を出て寮で生活しているが、今回、札幌の展示会を手伝ってほしいと帰省してもらった。長男も二男も「また木箱？」と言いながらも、誰よりも父親の思いを汲んだセールストークができる営業マンとして大活躍した。

週末は息子たちが売場に立って宣伝してくれました。

◆　◆　◆

新しいことにチャレンジし、それを続けていくことは本当に難しいことだと思っていた。でも夫の取り組みを傍でずっと見てきて、情熱をもって取り組んでいる姿に、人は応援したくなる。そしてその熱がさらに作り手のやる気を高めることを目の当たりにした。

本業である大工の仕事もきちんとしながら、ものづくりも手を抜かない。年々大変そうではあるが、それぞれが充実し、相乗効果を生んでいるようだ。

夫はよく「自分に正直に」、そして「貴女はどう？」と聞かれる。言葉に詰まる私に「自分に正直にいないと、自分を裏切ることになる。そうすると、人には優しくできない。自分のやりたいことをやり切る、やり続けることで、人にも優しくなれると思うんだ」。

自分に正直に生きる夫は、アラフィフ間近の私に何を言わんとしているのか。残りの人生をどう生きるか、お題を出された気分だ。さ、どうしようか。

…　…　…

一年間ありがとうございます。

（編集部）